

日本ロレンス協会第 53 回大会プログラム

(Zoom 配信によるオンライン開催)

◎日 時： 2022 年 6 月 18 日 (土)

◎形 態： Zoom 配信によるオンライン開催

(会員の皆様には、当日までにメールにて Zoom の URL をお知らせいたします。)

事務局連絡先：立命館大学法学部 石原浩澄研究室

TEL: 075-466-3204 (石原研究室)

Email: hit00347@law.ritsumeai.ac.jp

【役員会】

日 時： 2022 年 6 月 18 日 (土) 10 : 30~12 : 30

形 態： Zoom 配信によるオンライン開催

【大会】

◎開会の辞： 会長 田部井 世志子 (北九州市立大学特任教授) (13 : 00~)

◎事務局からの連絡： 事務局長 石原 浩澄 (立命館大学教授)

研究発表① (13 : 10~13 : 45)

司会 大平 章 (早稲田大学名誉教授)

『息子と恋人』における病いと語り

井上 麻未 (聖路加国際大学教授)

研究発表② (13 : 50~14 : 25)

司会 浅井 雅志 (京都橘大学名誉教授)

Aaron's Rod のスピリチュアリティ——出版 100 周年を祝して

武藤 浩史 (慶應義塾大学名誉教授)

——休憩 (10 分) ——

シンポジウム

(14:35~17:35)

D・H・ロレンスの言語表現の独創性

司会・講師 大山 美代 (広島修道大学講師)

ロレンスの“agony”と“anguish”をめぐる思想と表現技法の展開

講師 大山 美代 (広島修道大学講師)

D. H. ロレンスの「多彩」な “darkness”

講師 加藤 彩雪 (大妻女子大学専任講師)

D. H. ロレンスの初期～中期作品における同性愛的表象

講師 田島 健太郎 (九州工業大学講師)

後期ロレンスにおける「純粹」探求の展開

――『無意識の幻想』から『翼ある蛇』、『チャタレイ夫人の恋人』にかけて

講師 大江 公樹 (早稲田大学大学院生)

◎ 総会 (17:45~18:10)

(引き続き Zoom で行います。)

◎ オンライン懇親会 (18:15~19:30)

閉会のあいさつ:

副会長 石原 浩澄 (立命館大学教授)

研究発表

『息子と恋人』における病いと語り

本発表ではロレンス作品における「病い」に注目し、特に『息子と恋人』における「病い」と語りの関係を明らかにする。欧米では語りによって「病い」の経験に注目するメディカルヒューマニティーズ（医療人文学）が1960年代から興り、医学教育に文学が取り入れられるようになった。以降、欧米においてメディカルヒューマニティーズ（以下、MH）は医学の歴史と哲学、文学と医学、医療倫理と法、およびこれらの学問分野のさまざまな組み合わせを含む学術体系として発展してきた。現在は英国ノッティンガム大学のポール・クロフォードを中心に、MHはその対象を患者や医師だけではなく、患者家族や看護師、介護者など社会全体に大きく広げ、「ヘルスヒューマニティーズ」（以下、HH）という新たな分野に発展を遂げている。実際に、米国や英国ではMHおよびHHは大学院課程の中でも重要なプログラムとなっている。特にHHは人文科学の研究手法がヘルスケアの実践に応用され学際的な分野となり新たなケアの文化を作り上げている。一方、欧米とは異なる医学教育制度を持つ日本ではこれらの分野はさほど注目されてこなかった（Huffman and Inoue, 2019）。しかし、現在、HH研究に該当する研究の中には、日本人研究者が行っている研究、あるいは日本を対象として外国人研究者が行っている研究があり、これらは、文学、哲学、倫理学、人類学、社会学、歴史、言語学、老年学など多岐にわたる（Huffman and Inoue, 2020）。実際に、我が国でもヴィクトリア朝の小説における「病い」、具体的にはブロンテ作品における「病い」に注目した優れた研究（川崎, 2015）はあるが、モダニズム小説に関する同テーマの研究は未だ十分になされていない。英国ではMH/HH研究を踏まえて、Peter Fifieldが*Modernism and Physical Illness: Sick Books*(2020)において、ロレンス、ウルフ、エリオット、リチャードソン、ホルトビーらのモダニズム小説における“the role of physical illness”を論じている。しかし、Fifieldの本書は作家自身の「病い」に注目し、ロレンス小説の作品分析に関してはいずれも断片的なものに留まっている。そこで本発表では、『息子と恋人』に焦点を当て、本作品において「病い」がいかに語られるかを考察し、ロレンス小説における「病い」の分析を試みる。

====

Huffman & Inoue (2019). A vision for health humanities in Japan: A proposed definition and potential avenues for application in nursing education and beyond. *Bulletin of SLIU*, 5, 1-7. (original article)

Huffman & Inoue (2020). Establishing, promoting, and growing the health humanities in Japan: A review and a vision for the future. In Crawford, P. et al. (Eds.) *The Routledge Companion to Health Humanities*. (chapter in an edited volume)

Aaron's Rodのスピリチュアリティ——出版 100 周年を祝して

武藤 浩史（慶應義塾大学名誉教授）

2022 年は James Joyce, *Ulysses* と T. S. Eliot, *The Waste Land* 出版 100 年の記念すべき年だが、D. H. Lawrence, *Aaron's Rod* 出版 100 周年でもある。これを祝して、*Aaron's Rod* の現代的な意義を、“spirit”をキーワードとして、探してみたい。

ロレンスの思想を反キリスト教の文脈で考えることはもちろん可能だが、歴史的に位置づけるためには、むしろ、彼が生きた時代に特徴的なキリスト教の読み替えの文脈の中に置き、William James や James Joyce など同時代人との比較分析を通じて考えた方が、より生産的な気がする。

ロレンスがキリスト教の伝統的な禁欲主義的霊肉 2 元論に違和感を覚え、肉 the flesh に対立するものとして霊 the spirit を捉えることに留まらず、霊肉 2 元論の脱構築をさまざまに試みたことは知られている。Foreword to *Sons and Lovers*、*Twilight in Italy*、“A Study of Thomas Hardy”といった 1910 年代半ばまでの作品では、聖霊 the Holy Spirit というプロテスタント福音主義的な鍵語を用いて、これを試みた。また、*Sons and Lovers* に現れる生命原形質“protoplasm”という語を用いて時折語られる人間観も脱 2 元論的である。さらに、1910 年代後半に読んだ James Pryse, *The Apocalypse Unsealed* に触発された神智学系ヨガのチャクラ論的な脱霊肉 2 元論もある。

しかし、*Aaron's Rod* にはまた別種の脱 2 元論的戦略が潜んでいる。“Spirit”の語源に当たるラテン語の“spiritus”には、「霊」、「精神」に先立つ語義として「呼吸」、「空気」の意があり、また「風」の意もある。小説テキストの精査すると、*Aaron's Rod* 執筆に際し、ロレンスが“spirit”にまつわる語源的な含みを強く意識し、それを活用することで、霊肉 2 元論の脱構築を行っていて、その結果として霊肉 2 元論が脱構築されていることが明らかになる。

これは、イギリスの宗教学者 Paul Heelas が、Linda Woodhead と共同で執筆して大きな反響を呼んだ現代英国宗教論 *The Spiritual Revolution* (2004) で使われる“spiritual”の意味に近い。それは 20 世紀初頭に起きた宗教観の変化を反映しており、その意味で、ロレンスの *Aaron's Rod* で描かれる the spiritual の様相は古代ラテン文明につながると同時に、現代のイギリスにもつながっていると言えることができるだろう。

シンポジウム

D・H・ロレンスの言語表現の独創性

司会 大山 美代（広島修道大学講師）

ロレンスが好んで使う言葉、と聞くと何を思い浮かべるだろうか。「血の意識(blood-consciousness)」や「星の均衡(star-equilibrium)」といった、彼の独特の思想を端的に表す jargon ともいうべき用語が真っ先に連想されるが、その一方で、ロレンスはごくありふれた言葉の使い方に対しても強いこだわりを見せている。ある言葉を、伝統的な用法とは異なる意味において用いる場合もあれば、同じ言葉や表現、文体を何度も繰り返し重ねることによって、その反復が突出した強度を持ったり、あるいは意味作用の「ずれ」を生み出したりすることもある。このような特殊な言語感覚、表現の独創性は、ロレンス文学が我々の読書体験にもたらすインパクトの一つであり、時にロレンスの深遠な思想に触れる入り口となる。

本シンポジウムでは、4人の講師が“agony / anguish”、“darkness”、“pure”、“breaking / brokenness”というキーワードをロレンスのテキストの中から取り上げ、それらの表現から、これまで見落とされてきたロレンスの思想や文学的技法を浮き彫りにする。昨今の文学研究においてテキスト中心的な読みや解釈が主流を外れて久しいが、テキストの言語こそ、読書体験における最初の「気づき」の源であり、ロレンスという作家に通じる道として意義を持ち続けることを、若手講師の目線から提示したい。

ロレンスの“agony”と“anguish”をめぐる思想と表現技法の展開

講師 大山 美代 (広島修道大学講師)

J・チェンバースはロレンスの生涯について回顧する時、“all his theorisings and philosophisings only bear witness to his agony”と評している (Chambers, ‘A Man in Bondage’, in *D. H. Lawrence: Interviews and Recollections*, 1981, p. 297)。このように、ロレンスの書くことに対する衝動の根底には常に生への苦しみがあり、またそれは「苦しみ」というものを緻密に描こうとする彼の情熱からもうかがえる。

実際にロレンスは(特に前期の)著作を通して“agony”と“anguish”という単語を執拗なほど繰り返し用いており、これらの強い言葉には彼独特の思想が凝縮されている。“Daughters of the Vicar”等の初期から中期の作品においては、母親からの決別を乗り越えて新しい恋人へと向かう、自己存在の成熟と変化にともなう葛藤を描写する際に“agony”と“anguish”という言葉が目立って用いられており、organic destruction によって超克、再生、愛の成就をめざそうとするロレンス流の romantic agony を見ることが可能である。

ところが、“agony”と“anguish”が持っていた多様な暗示や含蓄の内容は、*The Rainbow*以降徐々に変化していき、これらの言葉は以前とは異なる文脈において使われるようになるだけでなく、テキストに登場する頻度が格段に減っていく。Stewart Smith (2018)による近年の研究を始め多くの論者が、ロレンスの後半生において、苦しみや痛みの感覚は、戦争と

喪失という主題をめぐってより顕著なものになったという解釈を示してきた一方で、この二つの言葉の存在感が明らかに減退しているのはなぜか。本発表では、“agony”と“anguish”に込められたロレンスの思想の変遷を、彼の伝記的要素と宗教的意識の観点から追い、その新たな文学的特質を明らかにしたい。

D. H. ロレンスの「多彩」な “darkness”

講師 加藤 彩雪 (大妻女子大学専任講師)

初期から晩年に書かれたテキスト全体を通して、“darkness”という言葉はD. H. ロレンスに多用された単語の一つである。しかし、テキストが執筆された時代や場所に応じて、darknessが指し示す内容は異なる。初期作品では、炭鉱世界の内部になぞらえられた人間の心の内奥が、darknessと表象されることが多く、それは血の意識 (blood-consciousness) にも関連付けて解釈することが可能な言葉である。キリスト教や機械化に依存する西洋文明との対比において、現代人の見失った本能的な感覚、身体的な何かを表現するために、ロレンスによって好意的に使われた言葉として darkness を解釈できるだろう。一方で、ロレンスの用いる darkness には、肯定的な意味合いだけではなく、短編「盲目の男」に見られるように、血の意識に従って生きることへの皮肉や、イングランドでロレンスが感じた生きづらさや恥辱を表現する言葉として使われることもある。さらには、オーストラリアやアメリカで書かれた中期以降の物語において darkness は、キリスト教以前の多神教を表象したり、ジョゼフ・コンラッドがそうであったように、他なるものとの邂逅における西洋人の心象風景を描写したりする際に使われるようになる。

本発表では、ロレンスのテキストに登場する darkness の意味が、テキストが書かれた時代や地域ごとに、多様にそして多彩に変化することを明らかにさせる。コンラッドを始めとする同時代の作家たちが、darkness という言葉にどのような思いを託したのかということと比較しながら、ロレンスの darkness の特異性を明らかにさせたいと考える。

D. H. ロレンスの初期～中期作品における同性愛的表象

講師 田島 健太郎 (九州工業大学講師)

処女作である『白孔雀』に男性同士のホモエロティックな交流を賛美するかの様な場面を含めたD. H.ロレンスは、それ以降『虹』や『恋する女たち』においても様々な形で同性愛的な欲望を描き込んだ。だがデイヴィッド・ガーネット宛の書簡を見れば、彼は英国社会

一般に認知された類の同性愛を本質的にナルシズムに根差すものと捉えている。また『無意識の幻想』ではウィットマン的な「同士の連盟」を提案した上で、この際に指向されるべき男性同士のホモソーシャルな協働関係から性的な要素を周到に排除している。このようなロレンスの同性愛に対する強く両義的な態度は当然広く認識されてきたが、その一方で作品中に描写 or 暗示される同性愛的な要素についての議論は、登場人物ないし作者自身のいわゆる「性的アイデンティティ」(＝同性愛者であったか否か) の特定に終始する傾向があった。今回はセクシュアリティの多様な意味作用の可能性を念頭に置きつつ、“breaking”, “brokenness” など「破壊」を取り巻く表現に注目し、初期～中期作品における同性愛的表象を読んでみたい。

後期ロレンスにおける「純粋」探求の展開

—『無意識の幻想』から『翼ある蛇』、『チャタレイ夫人の恋人』にかけて—

講師 大江 公樹 (早稲田大学大学院生)

1922年に出版された『無意識の幻想』の中でロレンスは「偉大なることは両性を純粋(pure)に保つことだ…純粋といふ言葉が意味するのは男の中にある純粋な男らしさ、女の中にある純粋な女らしさだ。」と述べている。ロレンスはその他にも、男女は十歳までは別々に養育されるべきなど、実現不可能な、また現代隆盛のジェンダー観からは猛烈な批判を受けさうな主張を並べているが、それら主張の根底には、「純粋(pure)」なものを求める姿勢があると言へる。『無意識の幻想』において「純粋」は性別と結びついてあるが、ロレンスの小説、評論を概観すると、「純粋」は他にも様々なものと結びつく。本発表ではロレンスにおける「純粋」について、『無意識の幻想』に加えて、人種と「純粋」の結びつきを窺はせる『翼ある蛇』、エゴイズムの超越と「純粋」を重ねて描いた『チャタレイ夫人の恋人』といふそれぞれ色合ひの異なる後期の著作の間で比較考察し、それらの間に通底する「純粋」の意味合ひを検討してみたい。